

# ある予備役将校の白露戦争体験（一）

— 神戸市立公文書館所蔵・山脇延吉家文書所収の軍事郵便を読み解く —

大谷 正

専修大学文学部教授

目次

はじめに

一 山脇延吉と山脇延吉家文書について

1. 山脇延吉について

2. 山脇延吉家文書と山脇延吉の白露戦争関係軍事郵便について

二 軍事郵便から見た山脇延吉の白露戦争体験

1. 白露開戦と第一〇師団への応召と出征

2. 大弧山上陸から岫巖・分水嶺・析木城の占領

3. 遼陽会戦と山脇延吉少尉負傷（以上、本号掲載）

4. 沙河会戦・黒溝台会戦・奉天会戦

5. 奉天北方の警備と帰国まで

むすびに

はじめに

本稿は日露戦争（一九〇四年～一九〇五年）に従軍した予備役将校の山脇延吉〔ヤマワキ・ノブキチ〕少尉（從軍中に中尉に昇進）が戦場から故国に送った軍事郵便を読み解くことで、彼の日露戦争体験を明らかにし、さらにその体験がその後の山脇の人生にどのような影響を与えたかを検討するものである。

山脇延吉は一八七五年（明治八）に兵庫県有馬郡道場村に生まれ、一九四一年（昭和一六）に死亡した人物で、『日本人名大辞典』（講談社、二〇〇一年）には次のように説明されている。

「明治―昭和時代前期の農政家、実業家。明治八年二月七日生まれ。東京帝大でまなび、明治四二年兵庫県會議員、大正一〇年県農會長となる。一五年神戸有馬電鉄（現神戸電鉄）初代社長。農村の自力更生を提唱、それをきっかけに昭和七年農林省に経済更生部が新設された。一四年帝国農會副會長。昭和一六年四月二六日死去。六七歳。兵庫県出身。」

上記の人名辞典の記述のように、山脇は昭和戦前期の兵庫県下では、長く兵庫県會議員（立憲政友会系）と兵庫県農會長を務めた地方政界の有力者として、そして「神有電鉄」（現在の神戸電鉄）という小さな地方鉄道の創設者として、名の知られた存在であった。彼が全国的に名を知られるようになったのは、昭和恐慌下の農業恐慌で農

村が苦しんだ時期、関西地域の府県農会（関西府県農会協議会、関西・中国・九州・北陸地方の二府一七県農会の連絡組織）を糾合して農村救済運動を展開するとともに、その運動の延長線上に政治団体「大日本農道会」を創設し、これらの影響力を背景に帝国農会副会長に就任してからであった。彼が発案し、当時流行った「自力更生」のスローガンが彼の名前を全国区にしたのである。しかし、山脇自身が帝国農会副会長に就任後、わずか二年ほどで亡くなったことと、「大日本農道会」が国家改造を目指す親軍的・ファッショ的な政治団体と見なされたために、敗戦後、彼の名前と業績は忘れ去られた。

彼の人物史研究は、地域史研究と農会・農政運動研究の両分野で存在するが、本格的研究は未だに無い状態である。筆者は、大日本農道会に関する論文を執筆するために一九八〇年代初め頃に神戸電鉄道場駅（当時は道場川原駅）付近の山脇家を訪ね、山脇延吉次女の大橋貴美子氏に御尊父についてお話を聞かせていただいた。その際に、山脇延吉の日露戦争従軍日記（山脇自身が描いた多数の挿絵入り）を見せていただき、出版の可能性についてたずねられたが、まだ三〇歳位で出版事情について知識がなかったもので、的確な返答ができなかった記憶がある。

今回、『専修人文論集』に拙文を投稿することを考えた時、最初はかつて見せていただいた山脇の日露戦争従軍日記を紹介しようと思ひ、現在山脇家文書を所蔵する神戸市立文書館を訪ねたところ、従軍日記の写真版はあるものの、従軍日記の現物は同文書館に所蔵されていなかった。現在も関係者が大事に保管しておられるのである。しかし、神戸市立文書館所蔵の山脇家文書のなかには、戦地から留守宅に送られた山脇延吉の軍事郵便とその関連資料がかなり大量にあったので、本稿では、帰国後整理された従軍日誌より生々しく、具体的な記述に富んだ軍事郵便そのものを紹介することで、彼の日露戦争体験を紹介し、その体験がその後の彼の政治的・社会的な経歴に与えた影響を検討することにした。なお、引用した手紙のなかには、現在の価値観から見ても不適当な表現があるが、

一 山脇延吉と山脇延吉家文書について

1. 山脇延吉について

まず、山脇家と山脇延吉自身について、前掲注(1)の『山崎延吉翁遺風』および洲脇一郎「山脇延吉ノート(二)」に依りながら簡潔に紹介する。

山脇延吉は一八七五年(明治八)、兵庫県有馬郡道場町塩田〔現在は、神戸市北区〕に山脇篤蔵の長男として生まれた。父の篤蔵は農業の傍ら、酒造、製油、肥料および米穀商を営んでいた。日露戦争段階には、小作人数五七人、小作地一六町余、自作地一町八反で、さらに山林経営を行っていた。これらの土地・山林は父篤蔵が集積したものと推測される。篤蔵は家業に従事する傍ら、有馬郡会議員、道場村長などの公務にも就いた地方名望家であった。

延吉自身は、一八八九年(明治二二)に姫路中学入学、一八九四年(明治二七)に熊本の第五高等学校に進学し、さらに一八九七年(明治三〇)に東京帝大工科大学土木工学科に入学した。このコースを順調に進めば、彼は明治期の土木建築業界のエリートとなるはずであったが、父篤蔵が急逝したため、一八九八年、学業を罷めて帰郷せざるを得なくなった。帰郷すると家業の整理を行い、酒造業を廃止した。そして一九〇〇年一二月、彼は一年志願兵として福知山の歩兵第二〇連隊に入隊した。

ここで、戦前の徴兵制度と高等教育在学者の関係について説明する必要がある。<sup>(2)</sup>

一八七三年（明治六）制定の徴兵令によって日本国民の男子は兵役の義務を課せられた。当初、太政官布告として制定された徴兵令は、一八八九年に法律として全面的に改正され（改正徴兵令）、さらに数次の改正を経て一八七九年には兵役法と改称された。明治初年に徴兵令が制定された当時は各種の免役規定があったが次第に廃止され、一八八九年の改正徴兵令が制定されて以降は、高等教育在学者と海外移民に対する徴兵猶予規定に限定されていた。そのため、山脇延吉のような高等教育在学者・卒業者は徴兵猶予の特典が与えられ、実質的には徴兵が免除されていた。

この他に高学歴でかつ経済力のある若者で、兵役を希望する者には、一年志願兵制度が用意されていた。これはドイツの制度を模したもので、中学校〔戦前の中学は五年制で、現在の中高一貫校に相当〕卒業以上の学歴を持つ、一七歳以上二六歳以下の青年が、兵役に服する間の食料・被服等の費用を自己負担して志願するもので、通常の陸軍兵卒の兵役期間が現役三年間であるものが、現役一年間に短縮される。一年志願兵は雑役を免除され、その多くは六ヶ月間で上等兵に進級し、一年終了時に試験に合格すると軍曹に進級の上、予備役に編入された。二等兵として入隊するものの、普通の兵隊とは別扱いで、猛烈なスピードで進級していった。軍曹で除隊した一年志願兵は、さらに三ヶ月間の勤務演習を経験して試験に合格すると予備役少尉に任官した。

通常の現役兵は三年間の厳しい兵役の結果、多くは一等兵で除隊し、上等兵まで達する者が稀であったのと比べると、実家が裕福で高学歴な若者がいかに優遇されていたのか、そして学歴と貧富という社会的格差によって兵士の運命が全く違っていったことが分かる。一年志願兵制度は入学定員が限られていた士官学校以外で下級将校を速成で養成する制度であり、軍備拡張が進んで将校不足が深刻になっていた日清・日露戦争前後の時期には、陸軍にとつ

て不可欠の制度であった。この制度は一九二七年に徴兵令が廃止されて兵役法が制定されると廃止され、新たに幹部候補生制度が設けられた。

山脇は一九〇〇年一二月に入隊後、一九〇一年一月軍曹に進級し、一二月予備役に編入されたが、除隊しないで三ヶ月間の勤務演習に従い、除隊後の一九〇三年三月歩兵少尉に任官した。そして、この頃、道場銀行頭取に就任し、さらに郡会議員にも選出され、父の跡を継いで地域の名望家としての道を歩みはじめた。

## 2. 山脇延吉家文書と山脇延吉の日露戦争関係軍事郵便について

つぎに神戸市立文書館に所蔵されている山脇延吉家文書について、日露戦争の軍事郵便を中心に説明する。

山脇延吉家文書は文書目録があり、文書番号は一番から二三五三番である。一つの文書番号に複数の点数の文書が含まれている例もあるので、文書の総点数はさらに増える。この文書群は山脇延吉関係の文書が中心であるが、一部、父の篤蔵関係の資料が含まれている。また内容は書類と延吉宛の書簡であるが、例外的に日露戦争の軍事郵便を中心に、延吉自身が書いた留守宅や知人に宛ての書簡が含まれている。これらの延吉自身の日露戦争関係の軍事郵便を山脇延吉家関係文書目録から選び出し、年代順に並べたのが、「表1 山脇延吉差出日露戦争関係書簡(年月日順)」である。日露戦争前年の一九〇三年の教育召集の際の手紙一通と、日露戦争凱旋後の大観兵式を参観した手紙一通を含め、全部で四八通の手紙があった。調査に割くことができた時間の関係で、山脇延吉家文書全部について現物を確認することができず、目録で確認した上で現物を閲覧したので、若干の漏れがあるかもしれないが、ほぼ山脇の書いた日露戦争出征中の軍事郵便を網羅していると思われる。

本稿はこれらの軍事郵便を読むことで、予備将校であった山脇延吉少尉の戦争体験を追体験することを試みる。

最初に山脇が入隊した福知山歩兵第二〇連隊について確認する。日清戦争終了後、日露戦争に向けての陸軍軍拡のなかで、陸軍の師団数は日清戦争開始時点の七個師団から一三個師団にほぼ倍増した。近畿地方では大阪の第四師団を分割して姫路に第一〇師団が新設された(一八九八年一〇月編成)。同師団の徴兵範囲は、兵庫県を中心に、京都府・大阪府・岡山県の一部と鳥取県に及び、福知山・神戸・姫路・岡山の四連隊区が設置された。第一〇師団配下の旅団司令部は姫路〔第八旅団〕と福知山〔第二〇旅団〕に置かれ、各連隊は姫路に歩兵第一〇連隊と歩兵第三九連隊が、福知山に歩兵第二〇連隊が、そして鳥取に歩兵第四〇連隊が置かれた<sup>(3)</sup>。

山脇が住んでいた兵庫県有馬郡で徴兵された兵士は、姫路の歩兵第三九連隊に所属して訓練を受けることになっていたにもかかわらず、山脇は自宅に近い福知山の歩兵第二〇連隊に入隊した。一九〇〇年段階では、一年志願兵は所属の連隊と兵科を選択できるといふ規定が徴兵令にあったためである。

日露戦争開戦前年、山脇は教育召集で姫路の歩兵第三九連隊で訓練を受けた。この教育召集の期間が終わろうとする一九〇三年七月二八日付の留守宅宛書簡があり、内容が興味深いので全文を引用してみよう〔文書番号①、目録番号1〕。

天候回復暑氣相加申候、皆々様御壯健之条奉賀候、当地ハ播磨ノ夕なぎトテ、夕方ニナルト全く無風ニテ午後十一時頃迄ハ少シモ風ナク、実ニ閉口致居候、乍去身体ハ頗ル元氣ナモノニ御座候、小生ノ儀実ハ中隊長初メ大隊長ノ見ル処ト相成目下大二信用ヲ得申候、其大要中一、二ヲ申候、委細は帰宅ノ上可申述候。

小生ガ入営ノ翌々日衛戍病院ニ行き親シク入院患者ヲ慰問セシコト中隊長ノ知ル処トナリ、大隊長及聯隊長ニ上申セリ。

⑤	19041208	山脇延吉	山脇延吉留守宅	11月28日発の書面到着。9月、10月の追送品4、5日前到着。靴も軍服も十分、現地で狐・羊・犬の毛皮購入し服の裏に貼り付け、旅順陥落も近い。	軍事郵便	28
⑥	19041222	山脇延吉	山脇延吉留守宅	4月1日三田出発以来の回顧と現在の戦況、遼瀋の戦況にて負傷以来、新聞を送られる。朝日・毎日・神戸・神戸又新・日本・放置・時事など読む居れり	軍事郵便	2
⑦	19050127	山脇延吉	山脇延吉留守宅	【第3信】(第一号)当地の気温、凍傷者少なし、旅順陥落及びハルビンチツク艦隊の件、露国内品について、ロシア兵のスケッチ有り、1月28日発、第二号に続く	軍事郵便	17
⑧	19050208	山脇延吉	山脇延吉留守宅	【第4信】追送品3個到着、気温零下20度以下に低下するが小生不相変健全、本年の積体のこと園田に依頼、南山に兄見、三塊石山に製作君を失い、今また黒台港に野村少佐艦を失う、沙河・黒台港の戦況について、	軍事郵便	18
⑨	19050208	山脇延吉	山脇延吉留守宅	【第5信】(出征以来最も壮絶なる戦況の大略 1月30日発の書面2通並に出置候、紀元節に陛下より酒肴料・菓子を下賜、別紙新聞紙切り抜きを戦役記念品として購入	軍事郵便	41
⑩	19050211	山脇延吉	山脇延吉	【第8信】昨日通場村愛国婦人会から慰問状到着、有原部隊愛国婦人会より酒肴料・菓子を下賜、彰徳酒、落葉松苗の床替え	封筒なし	15
⑪	19050222	山脇延吉	山脇延吉留守宅	【第9信】2月7日発第9在日到着、酒美子大切の書籍(子の成長記録?)御送り被下陣中見に勝る愈快無之、松岡利光君死亡の願について、戦報大に動して状況近きあり	軍事郵便	26
⑫	19050229	山脇延吉	山脇延吉留守宅	先進部隊前進、開原・昌国占領	軍事郵便	13
⑬	19050323	山脇延吉	御母上線、御祖母上線、千代子殿	絵はかき、南方より開原を望む	封筒なし	36
⑭	19050329	山脇延吉	山脇延吉留守宅	途中の賑車乘として柁櫓の根を取田、中尉に昇進、小生は職業軍人でないのでそれ程うれしくない、乃木大將を賞賛、頼いに頼りない進赤兵の形跡多し、歩兵第38聯隊所長の道場村民9名殉死、遠に女の赤、赤見坂中尉戦死、向君とは志願兵として入隊、見習士官も同時であった、追送品依頼、当地より開原までは7里	軍事郵便 [軍事郵便]のスタンプ無いが、軍事郵便らしい	42
⑮	19050402	山脇延吉	山脇延吉留守宅	饒兵衛縣政成功	軍事郵便	16
⑯	19050404	山脇延吉	山脇延吉留守宅	身体も肥へ、誠に気分宜敷、松岡兄には撫順と奉天の間にあり文通するが会えず、追送品依頼	軍事郵便	19
⑰	19050413	山脇延吉	山脇延吉留守宅	先月22日敵歩隊連合約8聯隊我が先進部隊を狂走、一時威遠軍門付近まで北上、現在、開原北方1里に有り、当地春色、内地の春を思い出す、ハルチツク艦隊のこと、スケッチを送る	[軍事郵便]のスタンプ無いが、軍事郵便らしい	14
⑱	19050508	山脇延吉	山脇延吉留守宅	4月分・5月分追送品受領、去る18日威遠軍門より東北方約7里を偵察、新聞紙は平和で持ち帰り、富美子の教養について(封筒は9月19日発、中身は6月23日である)	軍事郵便	29
⑲	19050623	山脇延吉	山脇延吉留守宅	中隊教練の検閲、聯隊軍旗受領、富美子の写真到着、6月22日発追送品到着、新聞にて三田のコレラ発生を知る	軍事郵便・封筒明治28年9月19日	21
⑳	19050727	山脇延吉	山脇延吉留守宅	高温に苦しみ、彼我諒和委員会の件、新聞に於ける有馬三田出自動車交通について	軍事郵便	27
㉑	19050802	山脇延吉	山脇延吉留守宅	占領地の秋、百花園の如し、秀子線跡の件	軍事郵便	48
㉒	19050806	山脇延吉	千代子殿	追送品受領、近況報告	軍事郵便	25
㉓	19050906	山脇延吉	留守宅中	本月9日付書面本日到着、当方面16日正午より休戦、新聞を読むと国民中に露国兵より難産者有り	封筒なし	24
㉔	19050919	山脇延吉	留守宅中	24日、師団司令部より遼陽部隊隊長を命じられ、26日開原發、27日遼陽着、在事に着手、大多忙	封筒なし	61
㉕	19050929	山脇延吉	山脇延吉留守宅	大規模式参観	封筒なし	31
㉖	19060504	山脇延吉	山脇延吉留守宅	2月2日札幌の房身夜襲逆襲戦に対し軍司令官(第4軍)陸軍大將白根野津貫道閣下より我が中隊に感状付与(2月12日付)	通常郵便	20
㉗	19061104	山脇延吉	御母上線、千代子殿		封筒なし・⑳と㉑の間に入る可能性が高い	39



9 ある予備役将校の日露戦争体験（一）

表 1 山脇延吉差出書簡・年月日順

文書番号	年月日	差出人	受取人	要旨	備考	目録番号
①	19030728	山脇延吉	山脇延吉留守宅	入宮後、中隊長及び大隊長の信用を得る	通常郵便	1
②	19040412	山脇延吉	母上様・千代殿	本日午前8時無事入宮、当脚団員も両3日の間に予想、留守中の注意事項8項	封筒なし	7
③	19040414	山脇延吉	山脇御内母上様・千代殿	昨日見送りに感謝、動員は16日頃か、妻の千代に留守家族の世話を依頼	封筒に切手・スタンプなし、誰かに手紙を托す	6
④	19040512	山脇延吉	山脇延吉留守宅	9日、神戸港より薩摩丸に乗船、同日夕刻抜錨、脚団の殿先頭、10日馬関を通過し統泊、12日対馬着	通常郵便	34
⑤	19040515	山脇延吉	留守宅中	12日京野峯原滞在、翌13日出帆、波浪強く船中動揺、その後海上漂着	封筒なし、⑥同封	33
⑥	19040516	山脇延吉	山脇延吉留守宅	鎮守館の様子、軍靴のスケッチ有り	通常郵便	32
⑦	19040615	山脇延吉	山脇延吉留守宅	新聞雑誌の送付依頼、去る8日輪船城占領、セルのシャツ、ズボン下送付依頼	通常郵便	43
⑧	19040624	山脇延吉	山脇延吉留守宅	岨崎周辺の風土・食品など報知、岨崎城スケッチ有り、新聞誌送付依頼、新聞にて内地の状況や戦況を知る、内地・戦地間の郵便事情について、靴の破損著しく2ヶ月に1足の割合で靴の送付を依頼、艦隊へ延吉の親子伝言依頼	軍事郵便	12
⑨	19040628	山脇延吉	山脇延吉留守宅	分木留守付近戦況、留守宅の注意事項を細く記す	軍事郵便	5
⑩	19040704	山脇延吉	有野村・洞吉治朗	先月11日付の書簡本日拝読、上陸以来の戦況報告	軍事郵便	8
⑪	19040719	山脇延吉	東京生田区北山伏町39・杉原泰治	書面8日拝読、昨日より前送開始、近く一快戦ある予定	軍事郵便	9
⑫	19040806	山脇延吉	山脇延吉留守宅	写真一枚着手、富美子の愛敬且成長に驚く、小生及び山脇嘉右衛門の負傷は事実無根、二丸村南字之介長房南国松は折木城攻撃の際名譽の戦死	軍事郵便	11
⑬	19040815	山脇延吉	山脇延吉留守宅	不審明、前送小晴として前線に出る	軍事郵便	46
⑭	19040816	山脇延吉	山脇延吉留守宅	前送が急なため追送品到着せず一回困却、冬服注文するも到着せず	軍事郵便	4
⑮	19040918	山脇延吉	山脇延吉留守宅	負傷退々伏方に向かい、不日退院帰隊予定、入院した野戦病院の不完全さを批難、(封筒は2月11日発、中身は9月18日である)	軍事郵便・封筒明治28年2月11日【第6信】	23
⑯	19040924	山脇延吉	山脇延吉留守宅中	一昨21日第一野戦病院預顔に付天打算なる第一野戦病院へ移る、先年福知山にて一年志願兵を共にする今木少尉(39歳隊)も入院中	【軍事郵便】のスタンプ無いが、軍事郵便か	45
⑰	19040926	山脇延吉	山脇延吉留守宅中	御面全く鑑合、昨日、二三日中に退院予定、追送品二個到着、本月11日の大阪朝日新聞神戸付録に小生の負傷のことがあり	軍事郵便	38
⑱	19040930	山脇延吉	山脇延吉留守宅中	27日退院帰隊、昨日8日追送品5個到着、被服も十分なのではや必要、	軍事郵便	47
⑲	19041029	山脇延吉	山脇延吉留守宅中	山脇嘉右衛門戦死之報に接する、	軍事郵便	40
⑳	19041104	山脇延吉	留守宅中	10月24日発の御手紙本日到着、切田氏の賃働の件、金貸しはまらぬ商業に傾倒、圓旋後は一切止め可申帳、種林が一審性に合う仕事	封筒なし	37
㉑	19041113	山脇延吉	留守宅中	寒気強し、陣中の糞桶、水が乏しくかも泥水、(山脇嘉右衛門)本家様は悲哀のことと気の毒に堪えず、この次の追送品にはカッターシ、乾物、トリ貝の乾物、元野真盛堂のリュック、ワイスキーを依頼	封筒なし	44
㉒	19041114	山脇延吉	留守宅中	本月4日出の御手紙拝見、残念至極、帰郷の上は権利及名譽の爲に戦う決心	封筒なし	35
㉓	19041119	山脇延吉	山脇延吉留守宅	寒気甚だしい、伊藤藤太郎君は病欠にて内地へ後送、富美子の写真依頼	軍事郵便	10
㉔	19041130	山脇延吉	泰治殿	葉書が39歳隊に回り延着、目下当地の空気が酷烈棋式零下10度まで下降、土氣頗る振るう、野村姉妹に宜敷お伝え願う	封筒なし	30

小生が第十中隊ニテ有馬郡ヨリ入営ナシ居ルモノニ特ニ訓戒ヲ加ヘタルタメ、日尚少ナキニモ不係彼等ハ大ニ勉強ナシ呉レ、彼等ノ成績ヲ挙ゲタリ。

中隊長余ニ喜ンデ曰ク、一年志願兵ヨリナリシ將校其数不鮮ト雖トモ、君ノ如キ精実家ニ未ダ不接、中隊ノ為メ大ナル利益ヲ得タリ、自分ハ君ガ入院患者ヲ見舞ハレタリ中隊ノ兵ヲ訓戒セラレタリ、又練兵中嚴格ナル態度ヲ以テ教練ヲ行ヒ、婦リテ舍内ニ入レバ温顔ヲ以テ兵ノ労ヲ慰セラル、コト等一々感服セリ、依テ大隊長ニ上申シタリ、然ルニ大隊長ハ既ニ君ノ他予備將校ヨリ勝レ居ルコトハ承知シ居ルト云ハレタリ、依テ益々勉強セラレタシト小生ニ注意アリタリ、如右有様ニ付御安神被下度候、残ル処ハ僅ニ七日ト相成申候、皆々様養生第一。

七月廿八日

延吉

留守宅一同様

この手紙によると、教育召集を受けて入隊した山脇延吉予備役少尉は、「入営ノ翌々日、衛戍病院ニ行キ親シク入院患者ヲ慰問」し、また所属の第一〇中隊では有馬郡出身の兵士に「特ニ訓戒ヲ加ヘ」たので「日尚少ナキニモ不係彼等ハ大ニ勉強ナシ呉レ、彼等ノ成績ヲ挙ゲタリ」という成果を得たと述べている。帝大入学という当時としては超高学歴を有するという自負を持ち、若くして地方名望家となった山脇は、臨時に召集された中隊内でも地方名望家として兵士に接し、兵士等も彼に従っている。

山脇の行動は中隊長・大隊長、さらに連隊長の知るところとなったが、軍隊内に地域の秩序を持ち込んだ彼の行

動を中隊長・大隊長という職業軍人は批判するのではなく賞賛し、中隊長などは「一年志願兵ヨリナリシ将校其数不鮮ト雖トモ、君ノ如キ精実家ニ未ダ不接」とさえ述べているのは興味深い。

山脇延吉の行動が評価されたことは、同時期に同じく教育召集を受けていた山脇本家の山脇嘉作から山脇延吉留守宅に宛てた手紙〔文書番号56、一九〇三年七月二二日〕に、「延吉様も中隊に於て殊の外御熱心ニ勉勵せられ、中隊長並ニ大隊長も大ニ御満足との事にて、小生等も其事相聞へ申候。何事ニ拘らず御勉勵の程は、小生等の常々睥睨する所にて此度の事など殊の外喜はしき次第にて、小生同郷として肩中広き感せられ候」、すなわち山脇延吉が教育召集の課程を熱心に務めたため、直属上司に当たる中隊長・大隊長から賞賛されたことは同郷人の誇りである、と記されていることから裏付けられる。

延吉と嘉作は近い親戚で個人的にも親しく、しかも同年配の一年志願兵仲間であつたらしく、翌年には同じ第一〇師団に属して共に少尉として日露戦争に出征し、戦場でも交流を持っていたことは第二章で紹介する。なお、山脇嘉作少尉は歩兵第三九連隊の軍旗護衛小隊長として沙河会戦の三塊石山の戦闘に参加し、連隊旗手品川少尉が敵弾に倒れると連隊旗手代理を務め、さらに代わつた山脇少尉自身も戦死して、連隊旗が彼等の血に染まつたという「血染めの連隊旗」で有名になるが、この事件についても後述する。

## 二 軍事郵便から見た山脇延吉の日露戦争体験

### 1. 日露開戦と第一〇師団への応召と出征

一九〇四年二月八日、日本陸軍の先遣隊が朝鮮仁川に上陸を始め、同日、連合艦隊が旅順港外のロシア艦隊を攻撃し、翌日、仁川でロシア軍艦撃破すると、日露戦争が始まった。

陸軍では、第一軍〔黒木為禎大将、近衛・第二・第一二の各師団〕が編成されて朝鮮半島を北上し、五月一日には朝鮮と中国の国境にある鴨緑江を渡河して、中国側にある九連城を占領した。さらに、第二軍〔奥保鞏大将、第一・第三・第四の各師団〕が遼東半島への上陸を五月五日から開始した。そして、山脇が所属することになった第一〇師団は大本営直属部隊となり、五月下旬に第一軍と第二軍の中間地点である大弧山に上陸して、ロシア軍の拠点である遼陽に向けて進撃した。なお、六月三〇日に、野津道貫大将を軍司令官とする第四軍〔第五・第一〇師団と後備第一〇旅団〕が編成されると、第一〇師団は第四軍に編入され、析木城の戦闘〔七月三〇日から八月一日〕と遼陽会戦〔八月二五日～九月三日〕に参加することになる。さらにこの後、同師団は沙河会戦〔十一月一日～二〇日〕、黒溝台会戦〔一九〇五年一月二五日～二九日〕、奉天会戦〔三月一日～一〇日〕に参加後、奉天北方の鉄嶺、開原、昌図まで進み、その地域の占領に当たって終戦を迎えた<sup>4)</sup>。

山脇延吉は第一〇師団の動員に先立って、四月一日に福知山歩兵第二〇連隊に入営した。これ以降、日露戦争出征中の山脇の行動の詳細を、前掲『山崎延吉翁遺風』の「二、軍事及地方編」と山脇が所属した歩兵第二〇連隊第五中隊戦友会が日露戦争三〇周年（一九三五年三月一〇日）を期して行った会合の記録を翌年刊行した『日露戦争の華』（森本幸太郎編、発行者山脇延吉、一九三六年一〇月、森本幸太郎は第五中隊所属の軍曹で戦友会のまとめ役、戦友会活動と私生活の両面で山脇の援助を受けていた）および山脇自身の軍事郵便を使用して紹介していく。

表1の文書番号②・③〔目録番号7・6、一九〇四年四月二二日・一四日〕は入営直後に書かれた手紙で、一つの封筒に同封されている。封筒には切手もスタンプも無いので、福知山の兵営から知人に托して自宅に送ったもの

のようである。

日露開戦と共に予期していた召集ではあったものの、実際に召集されると言い残したこと、頼んで置きたいことが多々あった。

四月一二日の手紙では、本日午前八時に無事入営したことや兵士の動員も近いことを伝えた後、「出征ノ用意トシテ調製致置候品物ハ、至急御送り被下度」、「又夏ノ物其他ノ品物ハ当方ヨリ大坂杉森ノ方へ依頼致」したいので「明日泰治〔伊藤泰治カ、山脇家の親族?〕殿を遣被下度」などと指示している。さらに八項目に亘って、家業関係の懸案事項である、裁判供託金、貸金・公債、小作地・山林などの処理について依頼し、最後に「火ノ用心ヲナスコト」を念押ししている。

家業も勿論気がかりであったが、父の死後、山脇家の若い家長となった延吉にとつて、それ以上に心配なのは残していく大家族のことであった。四月一四日の手紙には延吉の心情が率直に表れている。

山脇延吉は一年志願兵を終えた後に、二九歳で三重県桑名の素封家松岡利弼の三女千代（千代子）と結婚し、長女富美子をもうけたばかりであった。さらに父の死後家業を引き継いで苦勞してきた母親と祖母、まだ学生の弟の責任を負う立場であった。<sup>(5)</sup> 山脇の軍事郵便の宛名は、「御祖母上様、御母上様、千代殿」となっており（母と千代子の連名の場合もあり）、その内容は家族全員に自分の現状や戦地の状況を伝え、家業・家庭問題の処理を指示し、戦場で必要な将校用の追送品の送付を依頼するものであった。

一二日の手紙では入営前に種痘を受けた幼い長女富美子のことを案じていたが、自宅からの連絡を得て、一四日の手紙では「富美子壯健ノ由安心仕候」との安堵の声に続いて、「皆々様御養生專一二留守ヲ頼申候、御母上様、老祖母上様ニハ一層御用心ヲ頼申候、又千代どのハ充分母上、祖母上ノ世話ヲ頼申候、正夫ハ身体ヲ大切ニシテ勉



図版1 手紙④1904年4月12日 対馬厳原港

励シ他日ノ大成ヲ誤ルコトナキ様ニ頼置候」と細々と家族を思いやる文章を記している。

そして、この手紙はまたまた火の用心を戒める次の言葉で終わる。「火ノ用心ヲ大切ニスベシ、ランプニ御注意スベシ、大工其他職人が火ヲタクコトニ就テハ充分注意シ、屋内ニテハ之ヲ厳禁セラレタシ、余ハ後便ニ譲ル」。

つづく文書番号④・⑤・⑥〔目録番号34・33・32、一九〇四年五月一二日・一五日・一六日〕は、四月九日、神戸港を出発し、対馬厳原、鎮南浦〔朝鮮、大同江河口〕を経由して、遼東半島の大弧山に至る船旅の様子を家族に伝えるものであった。

山脇の所属する歩兵第二〇連隊第五中隊は、神戸港から四月九日に薩摩丸に乗船、同日夕刻、第一〇師団の先頭を切つて歓声に送られて出港した。山脇も「我薩摩丸ハ最先頭ナリ、実ニ我師団ノ最先頭也、我中隊ニトリ又小生箇人ニ於テ何タル光荣ゾ、之レ前途ノ吉兆トシテ一ノ望ヲ属スル價値アリト信ズ」と興奮気味に手紙に記した。ところが、日清戦争にも使われた古い小型船の薩摩丸は船足が遅いため次々と僚船に

抜かれてしまい、一〇日夕刻馬関〔下関〕に到着した時には僚船は先着していた。翌一日、馬関を出港して朝鮮に向かった輸送船隊は、濃霧と暴風雨のため、途中、対馬厳原港に避難した。文書番号④の手紙の端裏には、和歌「鳥も通はぬ対馬国に恋敷故郷の夢をみる」と厳原港らしきスケッチが描かれている。

天候が回復した一三日早朝厳原を出帆、鏡のように穏やかな黄海を北上して一五日午後、輸送船団の集合地である鎮南浦に到着した。文書番号⑤と⑥は途中の航海と鎮南浦の様子を伝え、いよいよ戦場に臨もうとする山脇の心の昂ぶりを伝えるものであるが、その心情を如実に示している書簡⑥〔目録番号32〕を全文引用しよう。戦地に近づくとつれて軍事郵便に作戦行動を書くのが憚られたのか、「一々申上度候へ共、差支ル点モ有之申候間差控申御座候」という言葉が見える。

#### 於韓国鎮南浦（大同江口）

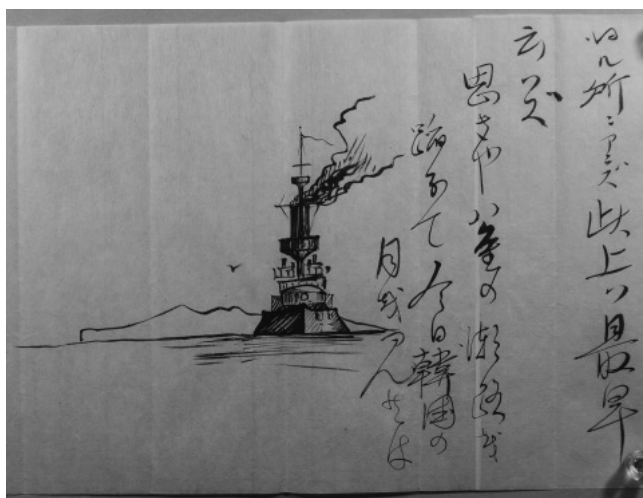
五月十六日

当地ノ模様ハ中々盛ナルモノニ御座候、一々申上度候へ共、差支ル点モ有之申候間差控申御座候、戦ハ勝タネバナラヌモノニ御座候、実ニ今日当地ニ於ケル我国ノ勢力ハ筆紙ニ尽シ難ク候、陸上ニハ日章旗ノ翻ルトシテ大日本帝国ノ国威ヲ發揮シ、水上ニハ幾多ノ運送船、軍艦、軸艀相接シテ碇泊セルノ光景ハ本国ニ於テ到底予想シ得ル所ニアラズ、此上ハ最早云ハズ

思きや八重の瀬路を踏分て今日韓国の月を見んとは

〔スケッチ・停泊中の軍艦〕

何日何地ニ向フカハ未ダ知ルニ由ナク又知り得難シ



図版 2 手紙⑥1904年5月16日 朝鮮鎮南浦・停泊中の軍艦

五月十六日午前  
留守宅 延吉

2・大弧山上陸から岫巖・分水嶺・析木城の占領  
山脇の属する第一〇師団は、五月一九日から三〇日にかけて大弧山上陸した。山脇の歩兵第二〇連隊第五中隊は、五月一九日に師団の先頭になって上陸して岫巖に向かい、六月八日、第一〇師団は岫巖城を占領したが、ここではロシア軍の抵抗は弱かった〔前掲『日露戦争の華』〕。つづいて六月二日から二七日にかけて、岫巖の北西の分水嶺で戦闘を行い、ここを占領した〔日本側の死傷者二〇五人〕。六月三〇日、野津道貫大将を司令官とする第四軍が組織されると、第五・第一〇師団と後備第一〇旅団が編入された。そして、七月三〇日から八月一日にかけて、第四軍は第五・第一〇師団を動員して析木城を攻撃、占領した。析木城の戦闘は第一〇師団が体験した初めての激しい戦闘で、日本軍・ロシア軍の双方が三万を越える兵力で衝突、戦闘は三日間に及び、日本側の死傷者は八三六人に達した。



第二節関係の軍事郵便は文書番号⑦から⑫である。文書番号⑦〔目録番号43、一九〇四年六月一日〕と⑧〔目録番号12、同年六月二四日〕は、岫巖占領後、岫巖周辺に残留しているロシア軍と小競り合いはあるものの状況が安定している時期であったため、一月ぶりに初めて体験する異国の状況〔岫巖城周辺の様子〕を留守宅に詳しく、スケッチ入りで報告している。つづく⑨・⑩〔目録番号5と8、六月二八日と七月四日〕は分水嶺の戦闘〔六月二六日～二七日〕を、さらに⑫〔目録番号11、八月六日〕は激しかった析木城の戦闘を伝えている。

文書番号⑦〔六月一日〕の手紙では、占領した岫巖周辺の状況と日本軍を歓迎する住民の様子を伝えているが、まだ戦闘は激しくなく、手紙ものんびりとしたものであった。

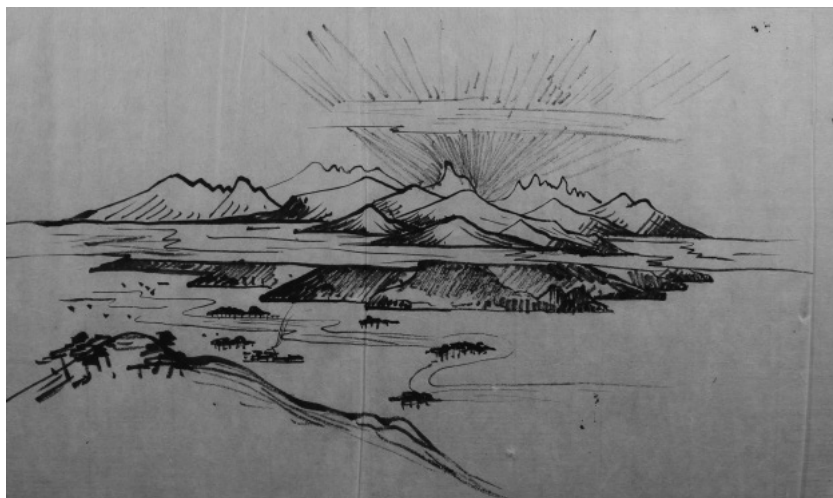
〔前略〕清国民到ル所日本軍ヲ歓迎シテ曰ク、日本兵好々の〔イーベンピンハオーハオデー〕日本軍ハ好シ、俄国兵不好〔ワーゴピンプハウ〕露軍ハ悪シ。

〔スケッチ・岫巖清国人図〕

当地ニテ得ラレ候糧食ハ鶏及卵ニシテ充分也、毎日鶏ノミヲ食シ最早イヤイヤト云フ有様ニ候。季節ノ変遷急ニシテ一週間程ノ間ニ夏景色ニ一変シタリ、樹木ニ乏シ唯柳楊ノ処々ニ散点シテ存スノミ、牧畜ハ盛ニシテ牛、馬、羊、山羊、豚、驢馬、騾馬等ノ山上放牧セラル、有様ハ実ニウラヤマシク候（後略）

この期間の手紙を読んで印象的なのは、故国と家族の様子を知りたがり、手紙と新聞・雑誌を送るように繰り返し依頼し、将校用追送品が届かないことに不満を述べる、ややホームシックに罹っている山脇の姿である。

手紙⑦では冒頭で内地からの手紙と新聞を待ち焦がれる心情を次のように述べている。



図版3 手紙⑦1904年6月15日 清国岫巖・東方旭光

「先月廿五日出之書面本日到着致候、新聞紙及他人ヨリノ書状モ共ニ到着仕候、凡ソ戦地ニ於テ各人ガ最モ希望スル処ノモノハ内地便ニ御座候間、今後書状ハ申ニ不及、新聞、雜誌、其他遠征者ノ旅情ヲ慰シ得ベキ材料ハ何物ニテモ宜敷候間御送り被下度候」、そして文末でも念を押すように、「新聞紙ハ広告ニ至ル迄読申候、御察被下度候」と付言している。

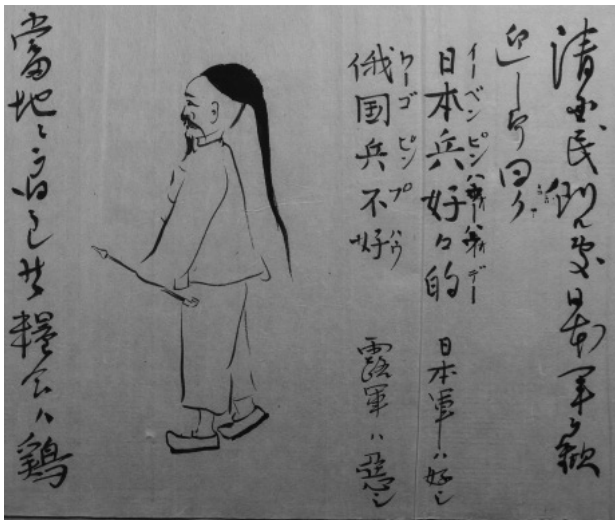
戦地の山脇が新聞を熱望した理由は、一つには日本国内の状況や故郷の様子を知るためであったが、もう一つの大きな理由は日露戦争全体の推移についての情報を得るためであった。同日の手紙には、戦地では「一般概略ノ戦報ヲ得タルノミニ有之、詳報ノ至ルヲ待居候、之レハ内地新聞紙ニ見ノ外無之候、内地新聞ノ速ニ到着ヲ待申居候」とあり、山脇たちは戦闘の詳細は「内地新聞紙ニ見ノ外無之候」という状況であったことが分かる。

この頃、山脇がこだわっていたのは、内地から自分宛の手紙が少ないことと、将校用に許可されている物資の追送品が遅れ気味なことであった。

手紙⑧〔六月二四日〕にも、「小包郵便ハ確ニ発送出来申



図版 4 手紙⑦ 岫巖・幕営図



図版 5 手紙⑦ 岫巖・清国人図

候間（内地ト同様）、郵便局ニテ充分取調べテ御送り被下度候、故郷ヨリノ通信程楽敷コト他ニ無之候間、通信ハ時々怠リナク御送り被下度候、小包ニテ時々必需品ハ御送り被下度候、小包ハ充分能ク包ミ二重三重ニ包ミ姓名宛名ハ明ニ楷書ニテ大書シ置被下度候」とあり、家族に対して、手紙を絶え間なく送ることと、戦地で必要なものを郵便小包で送る様に指示している。

手紙⑨〔六月二八日〕では上記のような不満が爆発したようで、「同中隊ノ将校ノ元へハ皆追送品送付ノ通知アリシモ自分丈ナシ、之レ追送品発送ガ遅レタルコトト大ニ失望致候」と不満を述べ、あるいは手紙を家族（具体的には妻の千代）が書かなかつたことを責めて、「戦地ニテハ内地ヨリ来ル書面程楽敷モノハナキ也、右特ニ申置候」と指摘している。彼の不満は親戚にも及び、「今日迄内地ヨリ書面ガ来リシモノ二十余通アルモ、親族間ニテハ山脇彰及伊藤宗太郎ニテ、泰治殿ヨリ二通、純一ヨリ一通ノミ也」と、親戚からの手紙が少ないことを嘆く。

一方で、写真館で撮影するように指示していた愛娘富美子の写真が到着すると、「写真式枚確ニ落手仕候、富美子ノ愛敷且成長セルニハ驚人申候、子供程生長ノ速ナルモノハ無之候、定メシ愛敷者ト遙々推察致居候、家族ノ愛物ト存候」と久しぶりに見る娘の愛らしい姿に相手を崩す父親であり、また「種々細々ナル御書面難有、数回繰返シ朗読致居候」と妻からの手紙を何度も音読する夫である、という寂しがり屋の側面もあつた（⑫、八月六日）。

山脇が将校用追送品や郵便小包で送るよう求めていたものは、「セルノシャツ又ズボン下」、木綿製や毛製の靴下、破損の甚だしい靴と靴墨であつた。さらに秋が近づくと、防寒用のシャツ・ズボン下・胴巻きや毛織物の冬服、さらに「戦用防寒用ノアミ上ゲ」靴を大阪や神戸で調製して送るよう指示している。以上のような手紙と将校用追送品・郵便小包は戦争の初期には遅れ気味だったようであるが、遼陽の戦闘後、日本軍とロシア軍の力が拮抗し、遼陽と奉天の間で戦線が固定化すると、順調に郵便と追送品が到着するようになった。

ホームシック気味であったものの、この頃の山脇は戦争の行く末に楽観的で、戦争の終わりも近いのではないかと考えていたようである。手紙⑨〔六月二十八日〕では、「クロパトキン如何ニ戦略ヲ考フルモ最早最後ノ決戦ヲ一  
地ニ試ミル外ナカラン、シカモ其決戦ヤ徒ラニ死傷者ヲ出スノミニシテ、此一戦ニヨリ直ニ露軍ハ全ク敗滅シ終ラ  
ンノミ、其決戦地コソ果シテ何地ナルベキ、彼ノ戦略ハ既ニ乱タリ、彼ガ指揮下ニアル將軍ハ数回ノ敗戦ニ恐怖ノ  
念益々盛ニシテ、戦殊ニ降者ノ数著敷ク増加スルノ有様ナレバ、九連城、金州南山ノ戦鬪ノ如キ劇戦ハ最早之ナカ  
ラン〔中略〕日本軍將卒ノ眼中ニハ最早露兵ナシ、心ハ既ニ走テ奉天、ハルビンニアリ、又壮ナラズヤ」と記し、  
すなわち最終決戦が迫っており、しかもその戦いは日本の勝利に終わり、奉天・ハルビン占領も可能であると述べ  
ている。

一方で、この頃になると知人の戦死の報が伝わってくる。五月二十五日から二六日に戦われた、金州付近の南山の  
戦鬪では、第二軍が野戦築城したロシア軍陣地を強引に攻めたため、四三〇〇人以上の死傷者を出し、予想外の大  
損害は大本営にショックを与えた。この時、妻千代子の兄〔桑名の松岡家〕が戦死した。山脇は義兄の戦死を知る  
と、「桑名へは香料其他供物ヲ丁寧ニスベシ、内地ニ在リテ病死ナドシタル人トハ異リ、御国ノ為メニ戦場ニ於テ  
国民ヲ代表名譽ノ戦死ヲ遂ゲタル忠臣ニシテ、親族一同ニ大ナル名譽ヲ与ヘタル人ナレバ決シテ笑ハル、様ノコト  
ナキ様呉々モ申達候」〔⑨、六月二十八日〕と妻に指示している。

戦況に楽観的であった山脇の気分も析木城の戦鬪〔七月三〇日から八月一日〕を体験すると変化する。前掲『日  
露戦争の華』は「七月三十日析木城の攻撃は本戦役最高の炎暑で、実に百二十度に達した。戦時武装に精米三日分  
（二升八合）を携帯、其総重量は丁度二斗米に相当する、兵卒互に駄馬一様と叫ぶ」と記している。華氏一二〇度  
は摂氏五〇度近いので信じがたいところがあるが、とにかく異常な高温の中、兵士は重さ三〇キロに達する戦時武

装と携行食糧を担って過酷な戦闘に従事した。そして戦闘は激しく、第四軍は八〇〇人以上の死傷者を出した。

析木城の戦闘の後、山脇は次のように書いてきた。

「小生及山脇嘉作君負傷ノコト全ク無根ノコトニ御座候、小生ハ未ダ一回モ下痢ダニ不致頗ル健全ニテ、数回ノ激戦ニハ加リ申候へ共負傷ダニ不致候間、決シテ世間ノ無責任ナル浮説ニ迷ザル様頼申候、嘉作君トハ去ル二日析木城戦闘後ニ面談仕候へ共頗ル健全ニ有之候、同君ノ中隊ニテハ他ノ二小隊長ハ戦死セシモ、同君及中隊長ノミ健全ナリト申居ラレ候、右ノ次第ニ付決シテ御心配被下間敷候〔中略〕当地此頃ノ暑氣ハ随分甚敷室内常ニ百度以上ニテ中々閉口仕居候、休養ノ為メ一寒村ニ停止致居候、休養ト云へハ甚宜敷候へ共兵卒ハ皆携帶天幕ニテ露営セリ、小生等及兵卒ノ一部ハ不潔此上ナキ蠅群ト共ニ支那家屋ニ籠居致居候、御察被下度候」〔手紙⑫、八月六日〕。

引用部分の冒頭で自分と山脇嘉作の負傷の噂を否定しているが、歩兵第三九連隊の山脇嘉作が所属する中隊では、三名の小隊長の内、二名が戦死するという激戦であったことが分かる。この手紙では知人の南国松（二良村南宇之介ノ長男南国松（歩兵第卅九聯隊第五中隊））が戦死したこと、戦闘後、駐屯している中国家屋の不潔さをこぼしている。山脇が占領直後の岫巖から送った手紙に見られた楽観的予想に反して、戦争は徐々に厳しいものとなった。

### 3. 遼陽会戦と山脇延吉少尉負傷

しばらく休息した後、山脇の部隊は北進して遼陽会戦〔八月二五日〜九月三日〕に参加することになる。ロシア軍は遼陽に二二万四六〇〇人の兵力を集め、遼陽を囲むように陣地を構築して日本軍を待ち構え、これに対して日本軍は一三万四五〇〇人の兵力を投入した。日本側は、遼陽の南東側から第一軍が、そして南側から第四軍と第二軍が遼陽に迫った。乃木の第三軍が旅順要塞攻撃で使えず、日本側は遼陽では兵力的に明らかに劣勢であったので、

日本軍は機動と局地的な兵力集中でロシア側陣地を突破する作戦であった。

最初に第一軍が八月二五日夜から開始したロシア軍の遼陽東方陣地に対する攻撃が成功し、つづいて二六日に第四軍・第二軍が南方から攻勢に出ると、ロシア軍は戦線を縮小して防禦を固めるため遼陽方面に撤退した。この結果、南方から攻撃した第四軍・第二軍は一挙に遼陽の付近まで進撃することができたものの、ロシア軍が構築していた遼陽前面の機関銃を装備した堅固な陣地帯（首山堡から早飯屯まで）とロシア側の砲撃に阻まれて、二八日から三一日まで立ち往生した。ロシア軍が意図的に、この鞏固な防衛陣地に日本軍を誘導したという見方もある。ここで日本軍は、山砲による砲撃がロシア軍陣地に対して功を奏さないの、歩兵の銃剣突撃による正面突破を図ったが、ロシア側の抵抗が強力であったため、犠牲者が続出した。のちに軍神となった橘周太少佐（戦死後、中佐に昇任）が戦死したのも首山堡の攻撃の際であった。

ところが九月一日未明、この方面のロシア軍は遼陽に後退したので、第四軍・第二軍は危機を脱した。ロシア軍撤退の理由は、日本側第一軍の最も北側にいた第一二師団が遼陽の北方に出てロシア側の撤退路である鉄道を脅かしたため、ロシア軍のクロパトキン司令官は遼陽南方の戦線を縮小して、余った兵力で東方から遼陽に迫った第一軍に反撃しようと試みたためである。

結局、兵力劣勢の第一軍がロシア側の反撃を辛うじて凌いだため、九月三日夜、クロパトキン司令官は遼陽からの総退却を命じた。ロシア軍を攻撃する絶好の機会だったにもかかわらず、疲労困憊し、砲弾を撃ち尽くした日本軍は退却するロシア軍を追撃できなかった。日本軍は遼陽を占領したものの、二万三五〇人以上の死傷者を出し、特に指揮官の消耗が激しく、戦闘能力は低下した。ロシア軍は約二万人の死傷者を出したものの、二〇万以上の兵力と武器を保持したまま奉天方面に撤退した。

以上が遼陽会戦全体の経過であるが、次いで山脇の所属部隊はどのように行動し、どのような損害を被ったのかを紹介する。

第一〇師団は第四軍の右側（東側）を進み早飯屯のロシア軍陣地帯を攻撃した。しかし、ここを突破できず多大な損害を被った。この時、山脇は歩兵第二〇連隊第五中隊第三小隊長であった。この戦闘で、山脇が所属した歩兵第二〇連隊の連隊長桂真澄大佐は戦死、第五中隊長寺尾佐喜馬大尉は赤痢で後送、寺尾大尉に替わった第五中隊長代理の第一小隊長岡敏政中尉は戦死、第二小隊長足立順市中尉と第三小隊長山脇延吉少尉も負傷した。つまり第五中隊は「全く将校の全員を失ひ、下士以下も三分の一に減少」する（前掲『日露戦争の華』）という壊滅的被害を被ったのである。

第三節関連の軍事郵便は、文書番号<sup>⑬</sup>から<sup>⑱</sup>である。文書番号<sup>⑬</sup>・<sup>⑭</sup>〔目録番号46・4、一九〇四年八月一五日と一六日〕は析木城から遼陽への移動を伝え、<sup>⑮</sup>・<sup>⑯</sup>・<sup>⑰</sup>〔目録番号23・45・38、一九〇四年九月一日、二四日、二六日〕は負傷後収容された野戦病院からの手紙であり、最後の<sup>⑱</sup>〔目録番号47、一九〇四年九月三〇日〕は帰隊後の状況を伝えている。

手紙<sup>⑭</sup>〔八月一五日〕は、「前進ノ急速ナル為メ追送品到着セズ、一同皆々困却仕居候、乍去左程ノモノニモ無之、種々工夫致居候間御安心被下度、其内ニ到着可致候、皆々一樣ニ到着セズ小生一人ノミニ無之候間、決シテ御心配被成下間敷候」で始まる。遼陽会戦を控えて緊張感に満ちた手紙であるが、軍機保持のためか具体的作戦計画を伝えていない。これにつづいて山脇は、細々と冬用の衣類の調製と送付を依頼している。そして手紙の最後は、天候の不順に対する不満を述べた後、「南京虫ニハ閉口仕候、又此頃ハ蝸ト称スル毒虫多々有之申候、充分注意ヲ要申候、困タ国ニ御座候」という、あきらめにも似た言葉で終わっている。遼東半島上陸直後の手紙に見られた楽



観論は影を潜めた。

この手紙の後、一ヶ月以上手紙は送られてこなかった。その理由は、延吉は八月三〇日の戦闘で負傷し、野戦病院で治療を受けていたからである。傷が癒えた九月一八日付で送ってきたのが手紙⑮であるが、その一部を省略して引用する。

拝啓 小生之負傷ハ追々軽快ニ向ヒ不日退院帰隊可致候、他ノ将校多クハ後方ノ病院（多くハ海城ノ兵站病院）へ後送相成候へ共、小生ハ当病院ニ残留致居候、之ハ軽傷ニテ短時日ニテ全癒ノ見込有之候故ニ御座候、兵卒ノ軽傷者ハ続々退院帰隊致居候、小生モ入院ノ際ハ四五日位セバ帰隊可致ト考居候処、思ヒシ程ヨリモ長引キ申候、創ハ極浅創ニシテ痛ハ更ニ無之候。

此野戦病院ハ二三日ノ内ニ閉鎖致候ニ付、小生等ハ第一野戦病院ニ属スル療養所へ移転スルコト、相成申候、今後十日間程経過致候ハ、帰隊スルコト、存候、左様御承知被下度候、重傷者ノ中、当病院入院後死亡セシモノ八十人以上有之候、誠ニ氣之毒ニ候、大ナルキ創口ニさし虫ガ生ジ遂ニ死セシモノモ不鮮候、名ハ立派ナル野戦病院、実ハ之レニ伴ハズ、国家ノ為メニ名譽有ル傷ヲナセル忠勇ナル軍人ガ其生命ヲ托セル野戦病院之病室、其不潔不完全ナル如何ナル内地ノ不潔ナル部落ニテモ之レニ不及。

昨日午後ブラブラ故戰場ノ見物ニ出掛申候、実ニ幾多ノ生靈ガ怨ヲ呑ンデ永キ眠ニ就キタル散兵壕ハ化シテ累々タル新墓トナリス、呼嗚（嗚呼カ）悲惨悲惨、敵ハ遼陽ノ周圍有ユル方面ニ防禦工事ヲナシアリタルモ、我軍ハ之レヲ攻略セリ、其工事ヲ見ルニ付テモ実ニ涙ガゴボレ申候、自分ガ負傷セシ所ヲ見テ実ニ身ノ毛ガヨダチ申候、ヨ―是位ナコトテ済ンダト思ヒ申候、何分ニモ「キビ」ノ中ニテ前面ガヨク見ヘズ、丁度敵ガ機関

砲ヲ八門モ揃ヘテ待チ居タル僅カ百五十間位ノ所迄猛進シテ負傷ヲナシタル次第二テ、昨日其敵ノ堅固ナル砲台ヲミテ身ノ毛ガヨダチ申候（之ハ生ガ勝手ニ猛進シタルニアラズ、他隊ト同様ニ前進シタルナリ）、六月分追送品到着、誠ニ便利ヲ得申候、七、八月分モ追テ到着スル筈御休神被下度候。〔中略〕

御祖母上様、御母上様、千代殿

郵便等ハ凡テ元ノ通り中隊宛ニスベシ 九月十八日 延吉

菅丈夫大尉負傷気毒ニ候、之レハ析木城ニテ重傷シサレトモ生命ニハ更ニ別状ナシトノコトニ御座候。本日、嘉作君来訪セラレ候、頗ル元氣ニ候。

この手紙では、まず、山脇自身の症状について軽傷で近く帰隊の予定である述べて家族を安心させた後、野戦病院が不完全で、負傷者の傷口に蛆が湧いて死亡する患者さえいる悲惨な様子を伝える。次いで散歩の途中で、山脇が負傷したロシア軍の陣地を見て、「丁度敵ガ機関砲ヲ八門モ揃ヘテ待チ居タル僅カ百五十間位ノ所迄猛進シテ負傷ヲナシタル次第二テ、昨日其敵ノ堅固ナル砲台ヲミテ身ノ毛ガヨダチ申候」と記し、「ヨ一是位ナコトデ済ンダト思ヒ申候」と述べる。日露戦争でロシア軍は、塹壕と機関銃座を組み合わせた防御陣地を構築し、それが強力な防御力を発揮した。その機関銃座の目の前に山脇の小隊は飛び出してなぎ倒されたのであった。自身が述べているように、顔面の負傷で済んだのは奇跡的な幸運であった。そして、手紙の追って書きに、歩兵第三九連隊に所属する、本家の山脇嘉作少尉が見舞いに来たこと述べられている。

次の手紙⑩〔九月二四日〕では、入院していた第二野戦病院から、第一野戦病院に移ったところ入院患者に多くの知り合いがいたこと、追送品が無事到着したことに感謝していると述べ、また負傷将兵は天皇・皇后からの慰問

と御菓子料を貰ったことに感激している。この他に、山脇は負傷した自分の従卒の実父に「礼状」を送ることを妻に依頼している。

長い手紙の末尾は追送品の依頼と家族への思いが次のように綿々と書き綴られている。「(前略) 防寒用外套ハ適当ニ御送り被下度候、又巻紙ト状袋ハ少々御送り被下度御依頼申上候、又「ウニ」ヲコボレザル様ニ瓶ニ入レテ、能ク「ツメ」ヲ為シ御送り被下度候、又浅草苔モ結構ニ候、兎角海魚ニ乏敷候間、海ニ縁アル品ハ結構御座候。富美子追々生長ノ由、日々智付申居候コトト存候、一家ノ愛物トナリ、一家ノ愛ヲ一身ニ集居候由、本人ハ実ニ七者ニ御座候、余リ大切ニ仕過ギザル様申上候、大事仕過候テハ、健康ヲ失シ申候、可成砂糖類ヲ多量ニ食セシメザル様御注意被下度候。正夫ハ勿論勉強致居候ト存候へ共、為念申度ク候、充分身体ヲ健康ニシ勉強大切ニ頼申候、皆々様追々冷氣ニ向候間御大切ニ頼申候。七月分追送品ノ舶来齒磨ハ結構ニ御座候、先ハ追送品到着御報迄、草々」。遼陽での激しい戦闘によって、第五中隊の将校仲間や兵士が多く死亡または負傷後送されるといふ厳しい体験をした後、負傷しながらも幸運にも生き延びた山脇は急にウニや浅草海苔が食べたいという生理的欲望が湧き、また幼い娘の富美子に対する愛情を隠すことなく最大限に表現している。山脇が送った四八通の軍事郵便のなかに、このように心の内をあらさまに書き記す手紙は少ない。

山脇は一ヶ月間弱の入院治療後、九月二十七日、退院して帰隊した。手紙<sup>⑱</sup>〔九月三〇日〕には、山脇の傷は完治して帰隊し、遼陽の南部に駐屯していること、追送品が次々到着しているので、被服は十分であることなどと述べている。

拝啓 小生本月廿七日退院帰隊仕候間御休神被下度候、中隊ハ今尚遼陽ノ南一里ノ地ニ留リ居り候、俄ニ前進

ノ模様ニモ無之候、小生ノ創ハ全ク癒仕候、動作ニハ更ニ差支無之候間御休神被下度候、唯創痕ハ実ニ此上ナキ従軍記章ニ御座候。

昨日八月分追送品全部

内ヨリ 三個

桑名ヨリ 一個

杉森ヨリ 一個

到着仕候、有難存候、被服モ充分ニ候間、此上ハ最早不必要ニテ、且運搬困難ニ付御送り被下間敷候、但シ今日迄ニ出来居候モノハ、ボツボツ御送り被下候テ宜敷候。草々。

九月卅日 延吉

留守宅中

山脇延吉家文書には、遼陽会戦で山脇が負傷した際の見舞いの手紙が二〇数通見られるが、それを年月日順に並べ直したものが、「表2 山脇延吉負傷見舞いの書簡・葉書」である。

書簡・葉書の送り主に関する情報が不足しているので、今後の調査が必要などころがあるが、既に紹介した山脇が召集された直後の手紙②で福知山の兵営まで来るように頼んだ伊藤泰治が、福知山の留守第二〇連隊関係者から山脇負傷の情報を得たのが九月七日、その後、九月一日の大坂朝日新聞神戸版に山脇延吉負傷の記事が掲載されると、多数の見舞い状が寄せられた〔手紙⑬〕に「本月十一日大坂朝日新聞神戸付録ニ小生之負傷ノコト記載有之候」とある。見舞いを寄せているのは、大森鍾一京都府知事の公的な見舞い状のような例外を除くと、親類縁者、知

表2 山脇延吉負傷見舞いの書簡・葉書

年月日	差出人	受取人	要旨	備考	目録番号
19040907	伊藤泰治	山脇延吉様御内	福知山にて、ある筋より遼陽の戦闘にて山脇延吉負傷の件を聞き取ったので連絡	福知山	87
19040910	二星三郎	山脇延吉様御内	山脇延吉負傷見舞い、新聞には未だ見当たらず	岡山市西田町	104
19040911	山脇滋	山脇延吉様御内	兄上、負傷見舞い	岡山市西田町二星方	92
19040911	壮太郎	山脇延吉様御内	山脇延吉負傷見舞い	歩20補ノ1	200
19040912	水野真三郎	山脇留守宅	山脇延吉負傷見舞い、新聞記事にて知る	三田	54
19040913	熊本謙二郎	山脇延吉殿御家族	山脇延吉負傷、軽傷とのこと	東京市牛込区北山伏町	82
19040913	杉内泰治	山脇延吉様留守宅	兄上様は軽傷なりとの手紙受け取り安心	東京市牛込区北山伏町熊本方	102
19040913	武田重治	山脇延吉様御内様	山脇延吉負傷見舞い	有馬郡有野村	107
19040913	芝 順兌	山脇延吉君留守宅	山脇延吉負傷見舞い、新聞記事にて知る	姫路市南町	195
19040913	春山某	山脇延吉様御内	新聞記事の山脇延吉負傷の件、問い合わせ	広島市大手町	201
19040914	大森鐘一	山脇延吉殿御家族	山脇延吉負傷見舞い	京都府知事	52
19040914	西山秀松	山脇延吉殿	近況報告並びに山脇延吉負傷見舞い、西山は杵木城の戦闘で負傷し、後送	姫路予備病院	93
19040914	山脇滋	山脇延吉様御内	兄上の負傷の経過如何	岡山駅にて	199
19040915	西原政吉	山脇延吉様御家内	山脇延吉負傷見舞い	美濃郡北谷村	196
19040915	松岡恭介	山脇延吉様方ちよ子殿	山脇延吉負傷見舞い	神戸市二宮町	197
19040915	村上延寿	山脇延吉様留守宅	山脇延吉負傷見舞い	多可郡黒田庄村	198
19040921	江口重吉	山脇延吉様	山脇延吉負傷見舞い	神戸市	108
19040922	二星増	山脇延吉留守宅	遼陽戦闘従軍金田軍医の手紙によれば、山脇君は左肩銃傷、日ならず快癒とのこと	岡山市西田町	83
19040923	西浦久之助	山脇延吉留守宅	山脇の負傷について	加西郡国野村	89
19040923	伊藤泰治	山脇延吉様御内	山脇延吉より書面到着、軽傷にて帰隊とのこと、一同愁眉を開く	加東郡福田村	99
19040925	安藤逸次	山脇延吉様御内	山脇延吉負傷の問い合わせ	神戸北長狭通	202
不明 19040925	中西幸太郎	山脇延吉様留守宅	山脇少尉の近況について	福知山岡野町	203
19040928	吉積龍太郎	山脇延吉様御令閨様	山脇延吉負傷の問い合わせ	水上郡佐治村	205
19041010	浜口某	山脇延吉留守宅	山脇延吉負傷見舞い	東京下谷区谷中町大雄寺	103
不明	山中繁蔵	山脇延吉留守宅	山脇少尉名譽の負傷、第二野戦病院で治療中、全快し近日帰隊の由〔軍事郵便〕	歩兵第39聯隊第5中隊	55

人、そして陸軍関係者である。見舞い状を寄せた人々の内、かなりの割合の人々と山脇は軍事郵便を交換していたと思われる。軍事郵便研究は発信と受信の両方の研究を将来進める必要があるので、表2の書簡・葉書はその手掛かりになるだろう。

## 注

- (1) 北内恵次朗編『山崎延吉翁遺風』（山崎延吉翁事績編集会、一九四三年）は、山脇の急逝後、山脇が長く会長職にあった兵庫県農会の関係者によって編纂されたもので、小伝・軍事及地方篇・農政篇・追憶及頌徳篇・年譜からなり、山脇を知るための基本文献である。近年、水嶋元『農民の父―山脇延吉の生き方』（知道出版、二〇〇七年）が出版されて山脇の生涯を知ることが容易になった。山脇延吉を研究対象とした論文としては、洲脇一郎「山脇延吉ノート（一）」（『神戸市史紀要・神戸の歴史』第八号、一九八三年）、大谷正「大日本農道会についての覚書」（梅溪昇教授退官記念論文集刊行会編『日本近代の成立と展開』思文閣出版、一九八四年）、松田忍「系統農会と近代日本―一九〇〇～一九四三年」（勁草書房、二〇一二年）のとくに第八章「二・二六事件と農政運動の組織化」、がある。
- (2) 加藤陽子『徴兵制と日本近代』（吉川弘文館、一九九六年）および一ノ瀬俊也『皇軍兵士の日常生活』（講談社現代新書、二〇〇九年）参照。
- (3) 原剛「陸軍の対露軍備拡張」（桑田悦編『近代日本戦争史第一編、日清・日露戦争』同台経済懇話会、一九九五年所収、三三三―三四六頁）。
- (4) 日露戦争に関する記述は、主に桑田悦・前原透編著『日本の戦争―図解とデータ』（原書房、一九八二年）と前掲『近代日本戦争史第一編、日清・日露戦争』を参考にして叙述した。
- (5) 前掲水嶋『農民の父』第二章「帰郷後の発憤」参照。
- (6) 山田朗『戦争の日本史② 世界史のなかの日露戦争』（吉川弘文館、二〇〇九年）一二五―一三〇頁。